明治大学図書館
第14回書評コンテスト

受賞作品集

2024年度

目　次

第14回書評コンテスト結果発表・・・・・・・・・・・・・ 3

講評（副館長　荒谷　博）・・・・・・・・・・・・・・ 4

書評コンテスト受賞作品・・・・・・・・・・・・・・ 7

受賞の言葉・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18

第 14 回書評コンテスト募集要項・・・・・・・・・・・・22

表彰式の写真・奥付・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23

第14回
書評コンテスト 結果発表

明治大学図書館書評コンテスト選考部会による
厳正な選考の結果、下記の11作品の受賞が決定しました。

	所属・氏名	書評対象図書 / 著者名
最優秀賞	経営学部 3年 牧野 未央	食べられる女 / マーガレット・アトウッド 著
優秀賞	政治経済学部 4年 足立 結	朝のあかり：石垣りんエッセイ集 / 石垣りん 著
優秀賞	情報コミュニケーション学部 3年 平田 絢音	夜と霧　新版 / ヴィクトール・E・フランクル 著
特別賞 （紀伊國屋書店賞）	法学部 1年 齊藤 こころ	密やかな結晶 / 小川洋子 著
特別賞 （三省堂書店賞）	商学部 2年 吉川 あおい	認知意味論：言語から見た人間の心 / ジョージ・レイコフ 著
特別賞 （丸善雄松堂賞）	理工学研究科 1年 米田 良人	砂糖の世界史 / 川北稔 著
佳 作	理工学部 1年 小野 泰輝	ビブリア古書堂の事件手帖 1 ～栞子さんと奇妙な客人たち～ / 三上延 著
佳 作	文学部 4年 東山 彩花	正欲 / 朝井リョウ 著
佳 作	文学部 3年 稲葉 光哉	ラウリ・クースクを探して / 宮内悠介 著
佳 作	政治経済学部 4年 松堂 拓未	手紙 / 東野圭吾 著
佳 作	経営学部 4年 鈴木 葉	傲慢と善良 / 辻村深月 著

講　評

書評コンテスト選考部会
明治大学図書館副館長　荒谷　博
（農学部教授）

受賞者の皆さん、おめでとうございます。書評コンテスト選考部会委員を代表して、講評を述べます。ところで、書評は誰のために何を目的に書かれるものでしょうか？皆さんご存知のように、対象の書籍を読んでいない人に読んでもらうために書くものです。批判的あるいは強い意見や分析、内容の断定や感想は読む前の読者には無用の情報です。小説であればネタバレはご法度です。似た内容の本や改訂を重ねている本、原作は同じだが訳者の異なる本などがある場合は、違いについての記述が必要なこともあるでしょう。さらに、コンテストなので文字数が 800 字 以上 1200 字以内と決められていました。このような多くの制限にしばられた書評を書いたことは良い経験になったはずです。

今年度は前年度の 29 件よりも多い 37 件の応募がありました。それらの中でも、多くの選考委員に優れていると評価されたものが、今回受賞された方々の作品となります。今年度選考委員の得票を得た作品は半数以上あり、概ね良い作品であったという印象があります。一方で、選考委員の半数以上の得票を得た作品はわずか 1 作品のみでした。これは、最優秀作品でも良いと評価しなかった選考委員がいたということで、書評を書くことの難しさを表しているのではと思います。様々なバックグラウンド、センス、ニーズなどをもつ選考委員がいるので当然の結果と思われます。この評価が一致しない様子は選考委員のコメントを読むことで感じられると思いますので、以下に最優秀賞と優秀賞に対する選考委員からのコメントのみですが、紹介します。なお、それぞれの作品について紹介したコメントの最後には講評を書いている中で私が思ったことを追記しました。

今回の最優秀賞の対象書籍は、マーガレット・アトウッド著・大浦暁生訳の『食べられる女』でした。アトウッドの処女小説で原作は 1969 年に出版（日本語訳は 1996

年に出版）されました。1960 年代を舞台にしたフェミニズム小説ですが、リアリズム小説でもあります。以下のようなコメントがありました。

興味をそそられる文章になっている。／面白い作品を選んでいる。／文章が上手いので読んでいて楽しかった。／非常によく魅力的な作品であることを匂わせている。／グロテスクなホラー小説？と思いきや、書評を読み進めると、フェミニズム小説だときた。その意外性に書評としての工夫の後が感じられる。／どんな問題提起をしているのか、何を考えさせられるのか、もう少し明確に示してあるとよかった。／カギカッコと二重カギカッコの使い分けは必要だ。

書評に書くべきかは難しいところですが、訳本なので、原作で読むべきなのか？原作のニュアンスが誠実に表現されているかなどの情報も欲しいとも思いました。

優秀賞は 2 作品あり、これらの対象書籍は、石垣りん著の『朝のあかり 石垣りんエッセイ集』、ヴィクトール・E・フランクル著・池田香代子訳の『夜と霧 新版』でした。

『朝のあかり 石垣りんエッセイ集』は詩人である石垣りんのエッセイ集で、書評に記述はありませんが、本書は生前に刊行された三冊のエッセイ集から選ばれた 71 篇による文庫オリジナル編集版だそうです。本書の書評に対して以下のようなコメントがありました。

書き出しはとても心引かれる。結びの言葉もうまい。／自己責任論と石垣りんの組み合わせが面白かった。／時代性とは無関係に、「自律」第一主義的な社会の価値観から生じる人間の矛盾や葛藤を、二つの詩を通じて、書評として上手に表現している点は秀逸なものを感じる。／良くかけていると思うが、対象書籍のタイトルにはエッセイ集とあるのに対し、詩集と思わせる内容でしか記述されていない。／詩の紹介と解説は、述べたいことの具体例として適切か、やや疑問も残った。

対象作のエッセイ集の一部を読んでみました。このエッセイ集の中には詩が織り込まれている作品が含まれていました。書評ではこの特殊（？）なエッセイのスタイルについての情報がなかった点が残念に思いました。

『夜と霧 新版』は精神科医・心理学者であるヴィクトール・E・フランクルの著作です。

『夜と霧――ドイツ強制収容所の記録』霜山徳爾訳本(1956 年)がありますが、フランクル自身が 30 年後に加筆修正した新版を池田香代子が訳したものが対象書籍です。

共感もてる内容で、作品を深く読み込んでいる。／胸を打たれる書評。文章力があるのはもちろんだが、内容も良かった。／収容所という現実感のない世界で何が得られるのかをうまく表現できている。／生きることの意味に対して、書評者の思いを具体的な経験を通じて記されている点を評価する。自分が主語だからつらい、自分らしくありたいからこそもがくなどのこれまでのあり方を否定し、生きる意味の定義が塗り替えられた、それに続く、現代社会のあり方への提起、このあたりを書評者個人の言葉でもっと生々しく表現できていればもっと面白い書評になったのでは、と思った。／衝撃を受けた言葉の意味がやや分かりにくかった。どういうことなのか、説明がほしい。／応募者の考えの主張が強すぎると思われる箇所がある。

対象書籍について少し調べてみました。本作は精神科医・心理学者である著者がロゴセラピーを確立する過程で重要な作品だったこともあり、多言語に翻訳されているベストセラーだそうです。書評を改めて読み直してみると、ロゴセラピーとの関係性をうまく加筆することで、より魅力的な作品であることをアピールした書評になったのではないかと感じました。

今、この明治大学図書館第 14 回書評コンテスト受賞作品集を読んでいるみなさんは、「他人に向けて書いた文章は残る。しかも訂正できる機会は極めて少ない。」ということを意識しているでしょうか？私自身、自分で書いた紙になった文章を読み直して、もっとしっかりと書けばよかったと後悔することがあります。そのほとんどは文章や表現、構成が拙くないか？誤字・脱字はないか？などのチェックを怠ったことに起因します。今後、文章を書いた際には是非本気で推敲してみてください。その日完璧だと思っても、翌日あるいは一週間後でもいいので読み直してみてください。直すべき箇所が必ず見つかり、ベターなものになるように加筆･訂正ができると思います。このような文章を揉む習慣がついてくると、今まで以上に文章を書く難しさや怖さがわかると同時に面白さも感じるようになると思います。最後になりますが、将来本学の書評コンテストのコンペティターの中から、執筆活動で生計を立てられるような校友が出てくることを期待しつつ、今年度の講評を終えます。

最優秀賞

『食べられる女』マーガレット・アトウッド著　大浦暁生訳

経営学部　公共経営学科３年

牧野　未央

『食べられる女』は、恐怖とユーモアが支配するまったく食欲の湧かないグルメ小説であると言える。この物語内で貪りつくされるのは女性の身体そのものだ。それどころか、彼女たちの思考やアイデンティティさえも跡形もなく噛み砕かれていく。よりおいしく、より食べやすく。『The Edible Woman』、食用としての女性という以外の道は、彼女たちに残されているのだろうか？

主人公であるマリアン・マカルピンは市場調査会社で働く 20 代の女性。奔放でアクの強い女友達のエインズリーとルームシェアをし、恋人のピーターは弁護士。ピーターとの結婚が決まり、なにもかもうまくいっているはずなのに、出会ったばかりの大学院生、ダンカンのことがなぜか頭から離れない。また、同時期に彼女は食べ物を口にすることができなくなっていく。最初は肉、次はニンジン、卵……。

ピーターとの婚約パーティーのために予約した美容院でのマリアンの描写は象徴的である。髪を「ケーキのように」扱われ、「アイシング」や「デコレーション」されたマリアンは、ピーターにとってとびきりおいしいお菓子なのだ。支配的で、女性を見下し、マリアンに「女らしさ」を事あるごとに強要するピーターは、自分の提案通り美容院に行き、自分好みの服を着て微笑んでいるマリアンを、文字通り消費することしか考えていない。甘い砂糖で飾られた、おいしく食べやすい女性を手に入れられるはずだったピーターの計画は、しかし成功直前で頓挫する。

女性の主体性は、女性の身体や意思を丸ごと食らおうとするピーター、あるいはピーターたちにとっては猛毒なのだ。だから、ピーターはマリアンの作ったケーキを食べることができない。女性の身体を模したそのケーキは、どこかユーモラスな外見とは裏腹の、燃え盛る怒りを宿してきっと彼を見上げるだろう。この作品は女性 VS 男性という単純な二項対立をエインズリーやダンカンといった登場人物たちを通じて巧妙に避けながら、一人の女性の反抗と自立を描いている。そのとき、物語は悪趣味なグルメ小説ではなく、力強いフェミニズム小説として変容するのである。食用ではなくただ同じ人間として尊重されることを求め、ときに闘う女性を、いつの時代もピーターたちは恐れている。Edible ではないマリアンのしびれる日々と結末を、どうかじっくりご賞味あれ。

優秀賞

『朝のあかり：石垣りんエッセイ集』石垣りん著

政治経済学部　政治学科４年　足立　結

自律的な人間が理想であり、他者に依存する者は努力が足りない弱い人間である。「自己責任論」的価値観が溢れる世界に、どうやって抵抗すればよいのだろうか。石垣りんは、現代の私たちにも通じる生きづらさを、手垢のついてない自分自身の言葉で表現している。

戦後を代表する詩人のひとりである石垣りんは、十四歳で就職して以降、銀行員として働きながら詩を書き続けた。女性の賃金が極めて低い時代にあっても、定年の五十五歳まで働き続けたのは、病気や障害のために働くことができない家族五人をひとりで養うためであった。彼女は、「働くこと」や「日々の暮らし」をテーマに、人間の本質を鋭く暴いた。

特に象徴的なのが、「くらし」という題の詩だ。

〈食わずには生きてゆけない。/メシを/野菜を/肉を/空気を/光を/水を/親を/きょうだいを/師を/金もこころも/食わずには生きてこれなかった。/ふくれた腹をかかえ/口をぬぐえば/台所に散らばっている/にんじんのしっぽ/鳥の骨/父のはらわた/四十の日暮れ/私の目にはじめてあふれる獣の涙〉

働くことができない家族をたったひとりで養っていた石垣。自律的な強い人間といえる彼女でも、本当は周囲の存在に生かされていた人間であったことに気づいた際の描写だと言える。

こうした石垣の気づきは、現代に生きる私たちと無関係ではない。例えば、就職活動においては「自律的な強い人間」の演出が求められることが多い。就活生にとって「あなたの強みは？」「リーダシップを発揮した経験は？」といった質問は、飽きるほど聞いてきたフレーズだ。進路選択などの場面で、私たちは「自律した強い」人物像を内面化する、と言える。

しかし、私たちは本当に「自律的な強い人間」と言い切れるのだろうか。私たちは常に、家族・友人・学校の先生といった周囲の存在に支えられて生きている。むしろ、他者への依存があってはじめて、私たちは自律的に生きていくことができるといえる。「自律」という言葉のみを強調するとき、私たちは自らの弱さを無視し、他者との支え合いの関係を見失うことになるのではないか。

「自律」のみを理想とする世界が行き着く先は、自律的・生産的でない者は排除されるべきとする「自己責任論」的世界だ。それを予感していたのは、石垣も同じであった。「領分のない人たち」と題された文章では、生涯独身であった彼女が抱えていた老後の不安、そして近い将来〈必要度の減った人間〉が社会から切り捨てられるのではという不安が綴られている。

「自己責任論」的世界に抵抗するためにはどうすればよいのか。石垣は続けてこう呼びかける。

〈不安は不安として、とにかく覚悟を決めたら、新しい連帯をこばむことなく、隣の老人と茶のみ話でもはじめたいと思います。/「私たち、いちど個人の殻をぬいでみましょう」〉

自らの弱さを否定せず、隣の他者とつながること。石垣りんの言葉は、この不完全な社会を生きる私たちに、いつだって寄り添ってくれる。

優秀賞

『夜と霧　新版』ヴィクトール・E・フランクル著、池田香代子訳

情報コミュニケーション学部　情報コミュニケーション学科３年

平田　絢音

本書のタイトル『夜と霧』は日本語版のために独自につけられたもので、ドイツ語版の原タイトルは「Ein Psychologe erlebt das Konzentrationslager（ある心理学者が強制収容所を体験する）」という。「夜と霧」とは夜陰に乗じ、霧にまぎれて人びとがいずこともなく連れ去られ、消え去った歴史歴時事実をあらわす言い回しである。この本は、収容所生活を「施設に収容される段階」「収容所生活そのものの段階」「収容所からの出所ないし解放の段階」の三つに分類し、それぞれについて詳細な分析を行っている。強制収容所でのきわめて主観的体験を、心理学者として客観的に見つめ直している。先に述べた三つの段階ごとに、被収容者の心理状態がどのように変化してゆくのか、心理学者の視点から丁寧に描かれている。

作者は収容所の中で、数えきれないほど多くの人々が生きる意味を見失い絶望する姿を目撃した。彼らに必要なことは何か。作者はこう語っている。「生きる意味についての問いを百八十度方向転換することだ。わたしたちが生きることからなにを期待するかではなく、むしろひたすら、生きることがわたしたちからなにを期待しているかが問題なのだ」。

この一節は私にとって衝撃だった。私の人生に対するイメージを根底から覆すものであった。人間と生きることの立場を入れ替えるという、こんなにもシンプルな思考の転換を、どうして思いつかなかったのか不思議にすら感じた。受験や人間関係に思い悩み、結局、人生とは思い通りにはならないものか、とやるせない気持ちになることもあったが、それは間違っていたと気づかされた。自分が主語だからつらいのだ。自分が思うようにしようともがくから苦しいのだ。私たちが問う側ではなかった。いつだって私たちは、生きることから問われていたのだ。その途絶えることのない問いかけに精一杯応えることがすなわち、私たちが人生と呼ぶものであろう。人間は、知らず知らずのうちに自分たちが生きることを支配しているような錯覚にとらわれている。私の中で、生きる意味の定義が塗り替えられた。この本は、生きるとは何かを語りかける、魂の記録である。

翻って現代社会に目を向ければ、それは希望に満ち溢れているだろうか。たとえ強制収容所ほどの悲惨さや絶望は無いにせよ、本当に生きる意味を実感しながら毎日を過ごしている人がどれほどいるのだろう。程度の差こそあれ、現代社会において、絶望という言葉の意味を身に染みて実感し、生きることがわからなくなるのは誰にでも訪れ得る瞬間だろう。人生の夜が訪れ、霧の中へ迷い込んでしまいそうなときに繙くと、一条の光が差し込んでくるような一冊である。過ぎ去った歴史的事実を知るためではなく、今を生きることの本質を知るため、ひとりでも多くの人に本書をひもといて欲しい。

特別賞　紀伊國屋書店賞

『密やかな結晶』小川洋子著

法学部　法律学科１年

齊藤　こころ

舞台となる島は、一つずつものの記憶が消え、頭の中がその分空白になっていくという、外界から隔絶された孤独な小島である。消滅とともに心も衰弱していく主人公たち、同じ島に住みながら記憶をなくさない特別な人々、彼らを脅かす秘密警察という三者の交錯を軸に、物語は展開する。

本作には、焚書、秘密警察、隠れ家と、ナチのユダヤ人狩りを想像させる要素が数多く含まれる。ユダヤ人狩りを避けるために隠れ家に潜んだ生活を描写した、かの有名な『アンネの日記』を想起する読者も少なくないだろう。本作の著者である小川洋子は、彼女が小説家になる原点こそが、『アンネの日記』であったと語る。実際に、アンネが「キティー」という架空の友人に宛てた手紙の形で『アンネの日記』を綴ったように、小川も日記形式の小説を綴り、妹の視点から姉の妊娠を描いた『妊娠カレンダー』で芥川賞を受賞している。アンネへの憧憬を抱く小川が、小説を通して再三にわたり伝えたい事柄とは、穏やかな日常のすぐ近くにも、避けようのない変容は存在するということであろう。その変容の過程で、いかにして自分の大切な結晶を守り抜くか。これこそが読者に与えられた、思考課題である。

物語は香水、エメラルド、ラムネの消滅に始まり、記憶をなくさない母への召集を巡る回想を終えると、語り手の現在へ移行する。消滅の対象が鳥、バラ、カレンダー、左足へと変容し、月日が経つにつれて不穏な雰囲気が強く帯びていったことを、読者はまざまざと実感させられる。カレンダーの消滅はすなわち季節の消滅を意味し、島は冬を繰り返す。日常生活を彩る果物や野菜は姿を消し、緊迫感、閉塞感から目を背けることはもはや不可能となる。左足に始まる身体の消滅以後、人々は身体的な不自由を抱えて生きていく。息をつく間もなく、物語は加速を続ける。「結晶化して消滅する記憶」という主題の裏で、「結晶化していく身体」という副題が進んでいく。読後に『密やかな結晶』の真の意味に気が付いたとき、読者は何を思うだろうか。

これは、第二次性徴を迎える思春期の中学生や高校生へ、積極的に薦めたい作品である。自己の意思に反して少しずつ空洞が増え、心が薄くなっていく本作の状況は、安定した自我とは対極にある。そのあやうさは、心身の成長や体の変化を理不尽に強要されるために、「明日の私も今日の私と同じである」と断言することを憚られるような、第二次性徴によく似ている。我々は誰しも、成熟した大人になるために変容と向き合わなければならない。いつか来る変容に対する心の持ちようを考えるためにも、今、変容の只中にいる彼らにぜひ、手に取ってほしい一冊である。

特別賞　三省堂書店賞

『認知意味論：言語から見た人間の心』ジョージ・レイコフ著、池上嘉彦、河上誓作他訳

商学部　商学科２年　吉川　あおい

この本は厚い。ところで「厚い」とはどういうことだろうか？　何 cm 以上であれば厚いと言えるだろか？　対象が本ではなく一枚の紙だったら？　小学生と相撲取りで基準は変わるだろうか？　…少々熱くなってしまった。

私たちは世界をどのように認知しているのかという問いや、思考と言語の関係性は長らく議論されてきた。その一つの見方が、言語は身体とは独立である世界を表す記号だとする客観主義である。その古典的な考えに対し、著者レイコフは新しい見方を提示した。

キーワードは「カテゴリー」である。本書の原題は *Women, fire, and dangerous things*、つまり『女性と火と危険物』だ。日本語話者にとって別々の種類に思えるこれら三つの名詞はヂルバル語（オーストラリア原住民の言語）の分類法では同じカテゴリーに入れられるという。レイコフはその謎を解き明かす（一一〇頁）。彼は日本語の分類詞「本」についても考察した。一般的に「本」は棒を数えるときに使うが、野球のヒットや電話での通話にも使える。後二者のような拡大適用の筋が通るのはなぜか（一二五頁）。レイコフはメタファーに注目し、私たちはカテゴリー化を身体性との関わりを持ちながら進める、と説く。

メタファーとは隠喩、すなわちそのものの特徴を直接他のもので表現する方法［大辞泉］で「時は金なり」など日常でも用いられる（二五五頁）。興奮することを「熱くなる」と表現するのも一例だ（四六五頁）。レイコフによれば、抽象的思考は身体的経験とのメタファーによって成立する。例えば〈多〉と〈上〉が結びついているのは、グラスに注がれた水の水平面の上昇といった身体的経験が量と鉛直性を関係づけるからだ（三三四頁）。

本書は厚い上に専門書であり、私のような言語学が専門ではない者が全説明を理解するなどできそうもない。出版も四半世紀以上前である。それでも私が本書を手に取ったのは、ゼミの先生の勧めがきっかけだった。そして、私はあなたに本書を勧める。というのは、そんな本書を今こそ読むべき理由があるからだ。

人工知能、特に生成系 AI が話題によく上るようになった。人間のような体を持たない AI が画面に出力する言葉は、もはや人が打ち込んだものと見分けがつかない。しかし本書によれば、その言葉は身体性と不可分の関係にある。これからも言葉を使うであろうあなたには、ぜひ本書を読み、言語と認知について考えてみてほしいと私は思う。この本を開くにあたって、全てを読み切る覚悟は必要ない。興味のある部分を読むだけで十分意味がある。そのために私も参照頁を示すよう心がけた。本書の前半部の題は「機械を超える精神」である。時を超えた知の重みを、あなたのその身体で感じてみてほしい。

特別賞　丸善雄松堂賞

『砂糖の世界史』川北稔著

大学院　理工学研究科　博士前期課程１年

米田　良人

「1789」「フランス革命」、そのように年代や事件や人名を覚えていく作業と化した歴史の授業は苦痛で仕方がなかった。実感の湧かない出来事を覚えるのは至難の業であるに違いない。歴史を理解するのに必要なのは「共感」と「理解」であると考える。例えば、砂糖の甘さを知っており依存性に「共感」できる人なら、なぜ砂糖が世界商品になったのかを「理解」することができるだろう。砂糖という親しみのあるひとつのモノを通じて近代の世界を冒険する、それが『砂糖の世界史』の目的である。

「砂糖のあるところに奴隷あり」というエリック・ウィリアムズの言葉が示す通り、十六世紀から十九世紀の砂糖の生産には背景に必ず奴隷が潜んでいるのである。甘い砂糖は皆に好まれるので多く作って多く売ればその分儲かる。世界中の実業家たちは砂糖の生産をいかに効率化するか、という問題に知恵を絞ってきたのだ。そこで、安上がりに大量の労働力を得る方法がアフリカから大勢の奴隷を連れてくるということであった。砂糖の誘惑は地球上の人間の配置すらも大きく変える力を持っているのだ。

現在では砂糖を摂取しすぎると健康被害をもたらすことが知られているため、警戒の目で見られることがある。しかしながら砂糖の影響は今でも根強く現代に爪痕を残しているのである。茶、コーヒー、チョコレートの文化から人種差別問題に至るまで砂糖の与えた変化は現代進行形なのだ。つまり、歴史を学ぶということは、今私たちが生きている世界が、どのようにして今日のような姿になってきたのかを、身近なところから考えてみることでもある。

世界で広く取引される「世界商品」は砂糖以外にも金や銀、タバコや香料、染料、茶、コーヒー、ゴム等が挙げられるが、世界中の多くの人が好んで共感と理解をできるのが砂糖というモノなのではないだろうか。本書は私のように歴史の授業によって歴史を学ぶことに苦手意識を持たされてしまった全ての人に読んでほしい。歴史を学ぶことに理系も文系も関係ない。同じ地球上で起きている凄惨な事件を理解できない事として見過ごしてはならないはずだ。世界を知る足がかりとして、砂糖と一緒に船に乗り込み、大西洋の植民地やプランテーション、カリブ海やヨーロッパをめぐる大航海に出かけてみよう。

佳　作

『ビブリア古書堂の事件手帖１ ～栞子さんと奇妙な客人たち～』三上延著

理工学部 情報科学科１年

小野　泰輝

この本は、本を語る本である。

勿論、他にも本についての解説が組み込まれた本はある。ただそれは、その本の紹介的な意味合いの解説であることが多い。物語の中心に本が据えられている、そしてかなり詳しい詳細が載せられている物は、中々ないだろう。

この『ビブリア古書堂の事件手帖』という作品では、本を中心に個性豊かなキャラ達が物語を紡いでいく。現実にこんな人がいるのだろうか、と疑問を持つことはない。それぐらい自然でいて生き生きとした登場人物ばかりなのだ。挙げておくべき名としては、主人公の五浦大輔。そして、この作品を代表する人物である篠川栞子だ。大輔は幼い頃のとある事件から本が読めないという体質を持ち、それに反するように、尋常ではないまでの本好きなのがビブリア古書堂の店主、栞子だ。この一見歪な関係が、物語を面白くするスパイスとなっていく。

シリーズ最初の作品である第一巻では、夏目漱石、太宰治といった著名な文豪の作品を中心に、加えて聞き馴染みのない古書をきっかけとした数奇な出会いが描かれる。普段本を読む機会が少ない人は話についていけるのか、と疑ってしまうがそんなことはない。その本の所有者自身の心の在り方が、その本の魅力を伝えてくれる。そして、それに付随するかの如く、栞子は本の知識を披露するのだ。あまりにも細か過ぎる解説となっているが、わかりにくいどころか理解しやすく、かえって面白い。中々本に興味が沸かない人でも、一体どんな作品なのか気になってしまうだろう。知っている人が多い文豪の作品についても、これまた知らなかったという興味深い知識が飛び出してくる。知っていることがあれば、密かに誇らしくなるだろう。

この作品の最大の見所は、やはり謎解きだ。古書堂の店主が、一冊の本から拾い上げる情報量の凄まじさは目を見張ることとなる。隠された真実が明らかにされていく過程には謎解き特有の快感が備わっており、自分では気付けなかった、見落としていた部分が指摘された時、見えていたものが裏表ひっくり返る感覚になるはずだ。

謎に覆い隠された、本を巡った人々の複雑な関係は予想以上のもので、読者は衝撃を受けるだろう。普段触れる機会の少ない古書という物の奥深さもまた、知ることになる。本に触れることにおいて、この物語は最適と言える。

佳　作

『正欲』朝井リョウ著

文学部　文学科４年

東山　彩花

「多様性」と聞いてどんな印象を受けるだろう。地球に生きる人々が他者のことを尊重し生活を営むこと、と考える人が多いかもしれない。しかし「多様性」は、本当にそれほど好ましいことなのだろうか。本当に目指されるべき目標なのだろうか。現代の過剰な多様性尊重主義に一石を投じる物語が『正欲』だ。

『正欲』は名前のない性的マイノリティに苦しむ人間同士がつながりを持ち始め、それをきっかけにマジョリティ側をも巻き込んだ事件に発展していく物語である。本作には、多様性を謳う社会に排除された人間の絶望や静かな怒りが文章に散りばめられている。また普通という呪いから逃れられないマジョリティ側の苦しみも克明に描かれている。複数の視点からの描写によって、読者は世間の不寛容さを痛感することになる。

「自分が想像できる“多様性”だけ礼賛して、秩序整えた気になって、そりゃ気持ちいいよな」これは『正欲』の主人公の一人が放ったセリフである。自分が認められる多様性とは、所詮自分が知っている範囲にしか存在しない。そこの秩序を整えて受容の姿勢をとっても、想像のつかないような未知のマイノリティには全くの無意味なのだ。世間が見つけていない志向は確かに存在している。志向の在り方、心の動き方は人それぞれ違うのだから、他人を丸ごと受け入れることは不可能ともいえる。

LGBT という言葉が広まってきている。ドラマや小説のテーマになることも多い。レインボーパレードも開催されており、多様性の象徴として市民権を得ている。しかし、彼らがマイノリティの中でも多数派であるということを忘れてはならない。陰に隠れたもっと少数の性的志向は確かに存在している。世間が設定したマイノリティという枠組みは、数の多いマイノリティのためのものであり、マジョリティが納得する形で作られている。

隠れたマイノリティがすべて認められることはない。誰かを傷つけること、年少者に性的興奮を感じる人もいるからだ。彼らは犯罪行為と自身の欲求との間で綱渡りをしている。性的欲望のために、誰かを犠牲にすることはあってはならない。『正欲』は性的対象が人ではない人間を描いている。読者は肉体も感情も持たないモノに主人公たちが好意を抱く姿を見て、彼らに感情移入してしまう。そこには犯罪行為が存在しないからだ。本当に受け入れられない、隠されるべき性的欲望の矛先を描いてはいないといえる。しかしながら主人公は絶対的少数派の一つの代表例として、読者と当事者の懸け橋になっていると考えられる。

多様性を認めなくてはならないという圧、世間から排除される恐怖、誰かを生きやすくするために誰かが生きにくくなる社会。自分のすぐそばにある事実から目を背けるべきではないことを、『正欲』は教えてくれる。

佳　作

『ラウリ・クースクを探して』宮内悠介著

文学部　文学科３年　稲葉　光哉

『ラウリ・クースクを探して』は冷戦下、バルト三国の一角で近年ではIT大国として知られるエストニアに生まれた、ラウリ・クースクの半生を描いた作品だ。

幼い頃からプログラミングに夢中だったラウリは、やがて同郷のカーテャ、ロシアから来たイヴァンと出会う。三人は友情を育んでいくが、エストニアの独立機運の高まりによって離散の憂き目に遭う。イヴァンは息子が運動の犠牲になることを恐れた両親によって生家に戻された。カーテャはラウリが参加した独立運動に巻き込まれ、下半身が不随になってしまった。自責の念から好きだったプログラミングもやめ、失意の日々をそれでも穏やかに過ごしていたラウリだったが、かねてからラウリを目にかけていたライライ教授に国の IT 事業を手伝わないかと誘われ、もう一度プログラミングの道を歩むことを決意する。そうして、ラウリはIT大国の黒子として歴史に名を残すことなく生きていく。

……という物語を「ジャーナリストが著し伝えている」という状況設定が、本作の最大の特徴だ。本作はラウリを追うジャーナリストである「わたし」の視点でラウリの生きた軌跡を辿っていく過程と、「わたし」によって書かれたラウリの伝記が交互に連なって進んでいく。ラウリの物語は、いわば作中作ということだ。この構造が、本作を「職業小説」たらしめている。ジャーナリストという職業を描いた、職業小説だ。

人のため、社会のために尽力する／した人々の来歴が国民に正しく届けられ、記憶されるということは尊ぶべきことだ。なぜなら、彼らの後ろ姿を見ることによってこそ、次代を担う人間の志が育っていくからだ。ノーベル賞やオリンピック入賞など明確な功績を残した人物だけでなく、歴史の陰で気高き志を持って生き抜いた人々のことをもメディアの形に残し後世に伝えていくことで、より多くの人間が自国に生まれたことに誇りを抱き、自らの道標となる人間を見つけられるようになる。その極めて重要な営みを担うジャーナリストという職業の不可欠性を、本作は教えてくれる。「わたし」が誰かは作中で明かされるが、著者がその人間にこの役目を託したということも、ジャーナリストという職掌の重要性を示唆している。

「わたし」が描きだしたのはラウリの半生だけではない。ラウリの恩師であり、IT大国の礎たる人材を育て続けたライライ、幼少期のラウリにこの国で生き抜く術を説いたリホ神父など各人が歴史に残した足跡が当時の社会情勢と共に丁寧に記されている。彼らひとりひとりがその時確かに「生きていた」ということを、その後何百年、何千年に亘って克明に語ってくれる。

「データは不死だ。ならば、わたしはラウリのデータを書き残す。（中略）ラウリ・クースクという男の、その生きた軌跡を」。ラウリの伝記は、こう締めくくられている。ラウリが選び歩んだ道に、やがて誰かが続く日を待ち、伝記は書庫に眠り続ける。

佳　作

『手紙』東野圭吾著

政治経済学部　経済学科４年

松堂　拓未

「差別のない社会を目指そう」

違和感を覚えるのは私だけだろうか。この言葉を聞くと体の中にヌメっとした不快感を覚えていたが、その正体が何であるかは突き止められずにいた。だがこの物語が違和感の輪郭を作り、正体を暴く手助けをしてくれた。

『手紙』はミステリー小説の巨匠・東野圭吾氏の作品である。これは主人公武島直貴が強盗殺人犯の弟というレッテルを貼られながらも、死に物狂いで生きようとする姿を描いた物語である。

この作品の魅力の一つは「美しく描かれていない」点だと感じる。一つ例をあげる。弟のために生きる兄は高校を中退し、弟の大学進学費を稼ぐために昼夜仕事に勤しんでいたが、腰を壊し仕事を失う。そんな中弟の受験が近づき早急にまとまった資金が必要になり、ふと魔が差して盗みを働くが、意図せず老婦人を殺してしまう。しかし収監された兄は、弟を大学に進学させてやれなかったことに後悔しているだけで、弟が強盗殺人犯の家族というレッテルでもがき苦しんでいるとは想像もしていない。それどころか毎月送られてくる手紙にはお気楽な内容を書いている。しかし偏見が溢れかえる社会で生きる直貴は、強盗殺人犯の弟という負の肩書によって、就職、プロデビュー、結婚…苦労してようやく見つけた希望の糸を慎重に登っても、ゴールにたどり着く寸前でぷっつりと切れる。やることなすことすべて、兄によって毎度のごとく壊されてしまうのだ。ずっと愛し合い、唯一の家族として苦楽を共にしてきた兄と弟。事件後両者が無慈悲に錯誤していく生々しさは非常に見事だ。東野氏は、直貴の人生を決して美しく紡ごうとはしない。これによって、我々も直樹を苦しめた差別社会を作り上げる一員であるという当事者意識を強制的に発芽させる。

そして私が最も特筆したいこの本の魅力は、東野氏の「差別」に対する見解だ。作中にてある人物が「差別は当然だ。」という、令和では間違いなく禁句であろう主張がなされている。しかしこれは暴論ではなく、非常に論理的な裏付けのもとに展開される。この本によって、私が持つ差別反対を声高に叫ぶ人たちへの違和感の正体は、「綺麗事での差別反対」というものだと気づいた。

ヘイトスピーチのような、恣意的に相手を傷つける差別は全くもって許されない。しかし我々はあらかじめトラブルを効率的に避けるための「偏見」という自己防衛システムを捨て、裸であらゆる人と接するべきなのだろうか。綺麗ごとでそう言ってはいないだろうか。『手紙』は決して私たちを逃がさない。そして何度も私たちに問いかける。たとえ命に関わるような不利益を被ろうとも、偏見を持たず万人に等しく接し続けることができると言い切る覚悟があるのかと。

佳　作

『傲慢と善良』辻村深月著

経営学部　経営学科４年　鈴木　葉

「あなたは弊社が第一志望なんですか？」 この質問が苦手だ。

「ハイ、ダイイチシボウデス。」

毎回、僕は笑顔で言うことが出来なかった。だって学校で習わなかったもん。建前という名の「嘘」をどうしてみんな吐けるのだろう？いつどこで教わったのだろう？僕はよく思っていた。

あと５行だけ就職活動の話をさせて下さい笑。多分読んでいる君は明治大学の生徒だろう。僕もその１人だ。そしてMARCHの一角を担う学歴を持った僕たちは企業側から「うちに入社してみない？」などのスカウトもいくつか来る。しかし、その大抵は僕達に馴染みのない会社だ。知らないだけで良い会社も多いだろうが、明治大学というネームバリューと比べると劣るものもあるだろう。そうすると有難い話にも関わらず「なんかピンとこないな」と思うことが往々にしてあった。

「就職活動は恋愛と同じ」

“人を選び、選ばれる”、“未来を託し、託される”そういうところが、僕は似ていると思う。

今回紹介する本は恋愛小説であり、それを超えた“内面”を主題とした物語だ。あらすじとしては “30代になった西澤架は、マッチングアプリで坂庭真実と出会い付き合い始める。しかし、親の敷いたレールの上を歩み善良に生きてきた真美は、架と婚約直後に失踪してしまう。消えた真美の行方を捜す中で、知りたくなかった彼女の過去と嘘が徐々に明らかになる。”

真実を知っていく中で、架は自身の無意識の傲慢さを痛感するシーンは胸を抉る。僕の一番痛かったセリフは「自己評価が低い一方で、自己愛の方はとても強いんです。」という部分だ。SNSでは充実した毎日を載せる友達と自分を比較することで低くなる自己評価。だけど「まあ俺のほうが面白いけどな～」とか行動も起こさないで斜に構えて自分を守る自己愛。人から評価されたい！僕の魅力に気づいてないだけだ！そういう自分の恥ずかしい部分をめくり上げられた感覚だった。あなたにもこんな一面あるのではないか？

その他にも何度も、芯をくった発言や解像度の高い心理状況が描写される。読んでいるあなたは何度もノックアウトするだろう。現に僕は何度も本を閉じた。賢者タイムのような時間の過ごし方をしていたと思う笑。

あなたの全ての言動や行動に至るまでの経緯、理由、心情は説明できますか？できない人はこの本を手に取ってみて欲しい。そして自分自身見つめ直してみて欲しい。必ず衝撃を感じるので、睡眠や食事、運動など、生活リズムを規則正しくして読むことをお勧めします笑。

そして最後に、この本を読了したら解説を必ず読んで欲しい。朝井リョウさんの解説が綴ってあるのだが、言語化能力の凄さに圧倒されます。劇薬ですので、まず自分で読了し、整理して、その後に読んでください。自分で整理せずに解説を読むと、あなたの感想は全て朝井リョウによって書き換えられてしまいます。その威力は読み終えた後のお楽しみに！

受賞の言葉

最優秀賞

経営学部　公共経営学科３年　牧野 未央

『食べられる女』は私たちに言葉と声を与えてくれる力強いフェミニズム小説です。排除ではなくあらゆる人たちと連帯し、この社会をよりよいものにしていく力がフェミニズムにはあること、その無限の可能性を、私は信じています。

優秀賞

政治経済学部　政治学科４年　足立　結

タイパが重視される時代において、一つの本にとことん向き合い自分の言葉を紡ぐことは、時代に逆行することなのかもしれません。しかし、そうした営みこそが、退屈から抜け出し人生を豊かにする方法だと思っています。

最後に、推敲にご協力いただいたゼミの担当教員である T.S 先生にこの場を借りて感謝申し上げます。

優秀賞

情報コミュニケーション学部　情報コミュニケーション学科３年　平田 絢音

言葉は生きていると思います。言葉は、本は、歴史のうねりを一身に受けながら、朽ちることなく輝きを増して人々に語りかけます。今回紹介した『夜と霧』は、まさに生きる言葉の結晶です。この作品は、人種問題に、文学にしかできない方法で警鐘を鳴らしています。言葉たちの静かな叫びを、ぜひ一度体感していただきたいです。

特別賞（紀伊國屋書店賞）

法学部　法律学科１年　齊藤 こころ

このような賞をいただけたことを心より光栄に思います。わたしが紹介した小川洋子の作品は、静謐で繊細でありながらどこか孤独が漂う、不思議な美しさが特徴です。この書評が、より多くの人が小川洋子さんの本を手に取るきっかけになれば嬉しいです。

特別賞（三省堂書店賞）

商学部　商学科２年　吉川 あおい

私が所属する商学部は、商学を専門的に学ぶゼミに加え、深く幅広い教養を学ぶゼミにも入れる「ダブル・コア」制度を設けています。その目的は市場現象を複眼的に分析し判断することです。図書館では知の蓄積と生産が行われ、書店での消費行動がそれを支える――図書をめぐる現象はこう分析できるでしょう。あなたも（特に商学部生！）書評コンテストに参加して、本を、そして市場を見る眼を鍛えてみませんか。

特別賞（丸善雄松堂賞）

大学院　理工学研究科　博士前期課程１年　米田 良人

実は私は本を読むのがあまり好きではない。しかし、本を読むことでしか得られない栄養素があることに気付いてからは読むようになった。「コスパ」という言葉は好きではないが、本を読むことは「コスパ」がとても良いと思う。私のように本嫌いによる本嫌いのための書評も大きな意義があると信じています。

佳　作

理工学部　情報科学科１年　小野 泰輝

文学、ミステリ、ファンタジー、ここに挙げなかったものも全て含めて、どんな本も誰かの人生に変化を齎す可能性を秘めています。そんな「可能性」を探しに行く、こんな楽しい行為は娯楽の中でもあまり無いと思います。本を読む人達が、そんな可能性に出会えることを願っています。

佳　作

文学部　文学科４年　東山 彩花

私にとって、書評は初めての経験でした。とにかくこの本が好きだ、ということが伝わるように書き始めました。本から得られた感情や情報を自分の中に留めず、アウトプットすることはエネルギーがいることだと知りました。

これからも書評を読み、そして書き、本を通じて多くの人の感覚に触れたいです。

佳　作

文学部　文学科３年　稲葉 光哉

「社会の役に立て」敬愛する祖父にそう言付かって以来、この曖昧模糊とした命題について考えてきました。この度は、その私なりの答えを書評に込めました。次代を担う人々の道標となる人間の生き様を伝える。そして、自らも次代の道標となる。この決意を、このような形で残せた事を光栄に思います。

佳　作

政治経済学部　経済学科４年　松堂 拓未

この度はありがとうございます。『手紙』は、私にとってお気に入りの小説です。この物語によって、（差別的な人でも）相手には相手なりの論理があるという当たり前を痛感しました。この小説から、考え方を異にする人との対立を超え、理解し合う社会にするための何かしらのヒントを得ていただければ幸いです。

佳　作

経営学部　経営学科４年　鈴木　葉

読書って疲れるよね〜。僕も飽きたら秒で本を閉じ、詳細な描写は読まなかったりする。

ジャンクフードみたいに言葉を摂取していることが多々ある。だけど稀に「波長の合う本」がある。その一冊と出会うと電流が走る。大学生のみんな！「非効率」を美徳とするこの国で、非効率なこの趣味を楽しもうよ。

明治大学図書館　第１４回書評コンテスト
募　集　要　項

明治大学図書館は、学生の皆さんが読書に一層興味を持ち、図書館を積極的に活用してくださることを目的として、下記の要領で「第 14回書評コンテスト」を開催します。どうぞ奮ってご応募ください。

書評とは本の内容を紹介し、論理的に評価・批評をした文章のことです。 このコンテストでは、対象となった本を読んでみたいという気持ちを喚起する文章を評価します。

1　**応募資格**　本学の学生・大学院生

2　**書評対象**　明治大学図書館が所蔵する図書
（文学作品・社会思想・科学啓蒙書など、分野・言語は問わない。）

3　**応募要領**

① 原稿は Word で作成、A4 サイズに 40 字×35 行で設定し、図書1冊につき、800 以上 1200 字以内かつ1ページ以内を目安とする。

② 書評は日本語で執筆すること。

③ 書評対象図書名、著者名、請求記号（文庫・新書の場合はシリーズ名とシリーズ番号）、出版社、出版年（再版の場合は、初版の出版年を記入すること）、所属、学生番号、氏名を書評作品冒頭に必ず明記すること（これらの事項は字数に不算入）。

④ 文書作成ソフト（Microsoft 社 Word 等）、A4 横書きで作成すること。

⑤ 応募作品は、本人が書いたオリジナル未発表作品であること。

⑥ 応募は 1 人 1 篇とする。

⑦ 応募作品の使用権は明治大学図書館に帰属するものとし、入選作品は、下記の印刷物等に掲載することがある。
『受賞作品集』（図書館作成）小冊子、明治大学図書館ホームページやその他の大学出版物など

⑧ 盗作や不適切な引用等があったと判断される場合、審査対象外とする。

⑨ 応募後の連絡はメールで行う。また、応募後、3日以内に事務局から受領確認のメールが届くので確認すること。もし、届いてない場合は必ず事務局へ連絡すること。

4　**提 出 先**　review_contest@meiji.ac.jp （書評コンテスト事務局）

5　**応募期間**　2024 年 10 月 1 日（火）～10 月 31 日（木）23:59 まで

6　**選　　考**　図書館内で設置した書評コンテスト選考部会で厳正に選考し、表彰作品を決定する。

7　**表　　彰**　賞状及び副賞（副賞は図書カード等。ただし、該当作品が選出されないことがある。）

最優秀賞	1篇	
優 秀 賞	2 篇	
特 別 賞	4 篇	（紀伊國屋書店賞1、三省堂書店賞 2、丸善雄松堂賞1）
佳　　作	5 篇	

8　**入選発表**　2024 年 12 月に、図書館内の掲示及び図書館ホームページで発表する。

9　**表 彰 式**　2025 年 1 月下旬～2 月上旬の間に、図書館長・来賓等の臨席のもと、図書館内で行う。（予定）

「書評の書き方講座」をオンラインで公開する予定です。是非、ご覧ください！

明治大学図書館
MEIJI UNIVERSITY LIBRARY

2025 年 2 月 4 日　表彰式

2025 年 3 月発行
編集・発行　明治大学図書館

明治大学図書館
MEIJI UNIVERSITY LIBRARY

〒101-8301　東京都千代田区神田駿河台1-1
TEL:03-3296-4254
URL: https://www.meiji.ac.jp/library/